

武吉次朗先生の「新語が映す中国」②

「高技能人材」 中国経済新聞 070801 掲載

中国で若年労働力の不足がしだいに深刻化しているが、いちばん払底しているのが「高技能人材」だ。日本では「技能士」という資格をもつ熟練工・技能労働者のことである。

これと対照的なのが大学新卒の就職難で、社会問題にもなっている。直接の原因として、1999年から大学生の定員大幅増が続いたこと、ITなどの人気分野に集中していること、理屈だけ覚え実用知識にうといこと、大都市でホワイトカラーになりたいと高望みしていること等が挙げられるが、根底には、生産現場や肉体労働を見下げる「儒教以来の伝統的観念」があるようだ。

話をもどす。いま中国では、政府認定の職業資格をもつ技能労働者が8720万人いるとされるが、そのうち高級職は4%に過ぎず、しかも定年間近の人が多し。企業は目の利益追求に躍起で人材育成を重視しておらず、技能労働者の待遇も低すぎる。加えて前述のような文化的背景から、技能労働者の社会的評価も高くない。

一例をあげる。世界では、「国際技能競技大会（略称：技能五輪）」が隔年ごとに開催され、機械加工から美容、造園まで50近い職種で、各国の選手が技を競っている。ところが中国は、これまでずっと参加していないのだ。これは、国際数学五輪では上位を保っているのとあまりにも対照的だ。「儒教観念」がここにも表れている、とは言い過ぎだろうか。

これではいけないと、国務院は昨年6月、高技能人材の大量育成を緊急課題として定めた。この指示は、高技能人材が科学技術成果の製品化と企業競争力の強化にとり、余人をもって代えがたい役割をもつこと、その不足が成長のボトルネックにまでなっていることを、率直に指摘した。その上で具体的対策を列記したが、その中には、大卒者の技能研修への優遇も含まれている。高等職業学校の強化とともに、企業が海外から養成システム・施設の導入と講師の招聘を行い、海外へ研修生を派遣することも奨励されている。

日本語の「いそしむ」には「働くことを通して技量を磨き、人格をも磨くことへの喜び」というニュアンスが含まれており、これにピッタリの中国語も英語もない、と指摘した言語学者がいる。物づくりへの執着とたゆまぬ研錬。職業への誇りと腕前への自信。

「企業は人なり」の社訓。日本人は持ち前の職人気質と集団性をテコに、全員参加の品質管理や生産性向上で、企業の競争力を強め、高度成長を推進した。中国に進出した日本企業がこの特色を発揮して、中国人従業員の技能育成面でも注目される実績をあげ、やがて中国も参加するであろう技能五輪で上位入賞を果たすなら、それは金銭でははかれない社会貢献になり、民衆レベルでの友好機運の醸成にもつながることだろう。

前回述べた「創新」の一翼を担う勢力として、長年くすんだ存在だった「高技能人材」という単語が、ようやく輝きはじめたようだ。